

編者はしがき

本書「生命篇」(下)は「病氣本来無」の「真理の言葉」が充ち満ちている。いつしか読む者をして「人間無病の世界」に引き込まれ、病氣になどなるはずのない人間が病氣になつてゐるのは単に夢を見てゐるに過ぎない、との思いに誘われる。

この一般常識からは遠く離れてゐるはずの、病氣本来なしの真理が、なぜ圧倒的な迫力で読者を魅了するののか。これこそが、真理の力であり、著者・谷口雅春先生の文章の力・言葉の力なのである。

たとえば、本書第十一章には「発熱」について言及されている。「普通『熱』が出る

と、病氣で『熱』が出たように思つて、悲観するのでありますが、『熱』というものは『生命』から出る。死んだ人からは『熱』は出ない。『熱』が出るということはその人の生きる力が旺盛である、害物と戦う力があるということです」(一二頁)

あるいは「痛み」に関しては、「あなたはその痛さを病氣だと肯定して、その痛さからのがれようとしていられるから痛みが去らないのです。あなたはその痛いということをお病氣だと思ひますか。一局部が痛むということは全身の血液をその一局部へ集中する動員命令が下つてゐるということです。……痛みも熱も病氣ではない。却つて病氣を治す生命力が強く働いてゐる結果です。……人生の痛み——人生では痛みといわず、悩み苦しみというのですが、この人生の悩みでも苦しみと思つて逃げまどえば、一層苦しくなる。この苦ししいのは治す働きである。いい換えれば、自分の神の子たる真性を鍛え顕す働きであると思つて敢然と受けることにすると、苦しみがそんなに苦しみでなく難なく人生の苦しみをくぐり抜けることになるのです」(四七―五〇頁)

あるいは「薬」については、「その薬を飲んで治つたということは、必ずしも薬の物

質的効力だというわけに行かない。純粹に物質的効力ならば、誰にでも一様に効かねばならぬが、患者の心が医者との暗示をどの程度に受け入れるかということによって、その患者に対する薬の効力が決まるのだから、医者の言葉、態度及びその言葉を信ずる人ほどよく治る（二〇—二一頁）

病氣とは人間生命と対等の力を持って、人間生命を脅かすような恐怖すべき存在ではない。谷口雅春先生が神の啓示によって書かれた『続々甘露の法雨』に「病氣は近づき来た猛獸にはあらず、『生命』と存在の王座を争い、『生命』を脅かすこと、積極的存在には非ざるなり。病氣よ、何者ぞ。汝は『無』の別名に過ぎざるなり」とある通りなのである。

この「病氣本来無」の大真理が広く世に伝わり、幾多の病氣が癒されてきた最大の理由は、「文書伝道」にある。それまで、「悟り」というものは、「不立文字」とか「言詮不及」とか言われて、なかなか文字には著すことは出来得ないと言われていた。しかし、それを敢えて、谷口雅春先生は文字に書き表されたのである。それに預かって力あったのが、先生の、その類い稀なる文才にほかならない。それによって、いわゆる「悟り」の、大量生産が可能となり、また全世界へと「教え」が宣布される基を築くこととなったのである。さらに付け加えて言うならば、谷口雅春先生直接ご指導の講習会も挙げねばならない。谷口雅春先生のご生涯は、まさしく執筆活動とこの講習会にすべてを捧げられたとも言っても決して過言ではない。そのご巡錫の足跡を辿ると、南船北馬、東奔西走、谷口雅春先生が赴かれなかったところはないというほど、全国津々浦々にまで及ぶ。ただただ頭を垂れるほかはない。

そして今一つが、信徒との座談、即ち「誌友会」での伝道である。本巻に収められている第十一章と第十二章とが、まさしくそれにあたる。これを読まればわかる通り、この誌友会にはからずも公開個人指導ともなっている。誌友の様々な質問、疑問、問題提起に対して、谷口雅春先生が親しくお答えになる。それによって「教え」に対する理解が、ますます深まっていくことになっていったのである。

ともかくも、本巻の通読によって、谷口雅春先生の「教え」から「病氣本来なし」が

どのようにして導き出されているかをぜひ感得願いたい。

「人間は何がなくともそれ自身で生きられるものである。この自覚が『生長の家』で説く『人間、神の子』の真理でありましてこの真理が解れば、その他のものはその自覚に伴う反映として自然に備わるものなのです」(一一九頁)

「私は『病気は無いのものだ』という事を実証したのであります。……生活難も、病気も、神の造り給うたこの世界には無いのであります。ただ吾々が迷って、その迷いの心が生活難や病気を造っているのであります。迷いを去れば生活難も病気も治るのであります。……真理をさとり、『病気はない、人間は神の子であるからいくら働きすぎても疲れない、どんなにしても無理にはならぬ』ということをはからせただけで、病気の治る実証を挙げ、ここに無一物の医学を完成することになったのが『生長の家』なのであります」(一三八―一四一頁)

そして最後に、著者である谷口雅春先生は絶対的確信をもって、本巻を含めた「生命篇」全編の最後を次のように締めくくっているのである。

「現在病気である方もこの原稿を読んで共鳴されましたならば、既に自覚症状が軽快してきたことと存じます」(一四六頁)

願わくば、本巻を熟読玩味され、神の無限生命の供給を自覚されて、「人間無病の素晴らしき世界」を実感体得せられんことを。

平成二十五年九月吉日

谷口雅春著作編纂委員会